

今月の御教え

神参りをするに、雨が降るから風が吹くからえらいと思うてはならぬ。その辛抱こそ、身に徳を受ける修行じゃ、いかにありがたそうに心経やお祓いをあげても、心に真がなければ神にうそを言うも同然じゃ。拍手も、無理に大きな音をさせるにはおよばぬ。小さな音でも神には聞こえる。拝むにも、大声をしたり節をつけたりせんでも、人にもものを言うとおりに拝め。

…金光教祖御理解 第六十八節…

解説

かつて本教教団の重鎮である佐藤範雄先生が、信徒をその参拜の仕方、上中下の三段階に分けて論じておられます。

上信徒とは「天気の好し悪しを全く問題にしないで参拜する人」。中信徒は「今日は天気が好いから好都合だ」とか、『雨が降って困るなあ』とか、思ったり言ったりしながら参拜する人。下信徒は「天気が好ければ参拜するが、雨風でもあればやめてしまう人」と、言う事でありませぬ。だから、お陰を受けるには「雨が降ろうが風が吹こうが、それを辛抱して参拜すれば、神徳を受け得る良い修行になる」との思し召しであります。又、信心を鍛えるには、この「参拜」と「御祈念」がありますが、「御祈念」は神様に聞いて頂くのでありますから、他の参拜者の迷惑になるような大声を出さなくても、心を込めて一心に祈れば神様に通じるのであります。要は外見や形よりも、真心が一番ということでありませぬ。勿論、一斉祈念の際は、力強く唱えることが大切ですが、個々のご祈念は、心中祈念、若しくは普通の声で真摯に一心に祈ることが大切であることをお教え下さった御理解であります。